京都精華大学
２０２３年度　入学試験問題

座席番号

【小　論　文】（11月13日）

時間　14時30分～16時

【注　意】

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子や筆記用具に触れないでください。

二、試験中の使用が認められたもの以外は、すべてカバンに収納すること。使用用具は黒鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム、鉛筆削り（手動式・小型に限る）とし、それ以外の使用は認めません。

三、携帯電話、スマートフォン、イヤホン、ウェアラブル端末、電子辞書、ＩＣレコーダーなどの電子機器類は、必ず電源を切ってから、カバンに収納すること。

四、試験開始の合図により、試験を始めて下さい。

五、解答は、すべて「解答用紙」の所定の欄に記入すること。

六、試験終了の合図とともに直ちに筆記用具を置いてください。試験終了後に解答用紙や筆記用具に触れた場合は、不正行為とみなすことがあります。試験監督者が指示するまで、絶対に席を立たないでください。

七、問題冊子および解答用紙は、試験終了後にすべて回収するので、持ち帰ってはいけません。

【問題】

次の文章を読んで、以下の設問に答えてください。

現場の国語の先生たちは今から先どのようにして国語教育[注1]を進めていったらいいのか、正直言って分からないのではないかと思う。学習指導要領[注2]の改訂があり、これまでとずいぶん違ったかたちで、国語教育を進めなければいけなくなりそうである。

この間、ずいぶんと話題になっていた、「論理国語[注3]」と「文学国語」という区分が何を意味しているのかは、私にもよく分からない。ネット上では、かなり批判的なことが書かれていたけれども、「論理国語」の実体が分からないので、コメントしようがなかった。

先日おいでくださった国語の先生から、直接「論理国語」の模試なるものを見せてもらった。かなり話題になったから、ご存じの方も多いと思うが、この模試は、生徒会の議事録と生徒会の規約を読んで、年度内に生徒総会を開くことは可能かどうかについて答えよという問題だった。一読天を仰いで絶句した。

どうやら、この模試の作問者は論理的な思考力というものを、契約書を読んだり、例規集を読んだり、マニュアルを読んで理解する能力のことだと考えたようである。これはいくら何でも「論理」というものについての理解が浅すぎると思う。

「論理的にものを考える力」を涵養（かんよう）することそれ自体はたいへんけっこうな教育目標である。それについては私には何の異存もない。文章の階層構造を理解したり、断片から全体の文脈を推理する力は複雑な文章を読む上では必要不可欠である。

しかし、この模試が素材にした規約とか契約書というのはまったく「複雑な文章」ではない。できるだけ誤解の余地のないように、一意的に理解されるように書かれたものである。そういう「可能な限り簡単に書かれたテクスト」を読むために、わざわざ「論理国語」というかたちで教育内容を分離して、従来の国語では教えられなかったことを教えるということの意味が私にはわからない。そんなものを私は「論理」とは呼ばない。

「論理国語」の問題を読まされたので、「論理とは何のことか？」を改めて考えた。

「論理的に思考する」というのは、私の理解では、断片的な情報を総合して、一つの仮説を立て、それを検証し、反証事例に出会ったら、それを説明できるより包括的な仮説に書き換えるという漸進的なプロセスのことである。これはカール・ポパーが「科学性」を定義した時の言葉である。

私が最初に「論理的に思考する知性」に出会ったのは、エドガー・アラン・ポウの『黄金虫』によってであった。10歳くらいの時のことだ。主人公が砂浜で拾った羊皮紙の断片をキッド船長の宝物の地図だと仮定して、暗号を解読し、ついに海賊の宝を見つけるという話だ。ポウ自身が暗号の専門家であったせいで、この暗号解読のプロセスは本当にどきどきするものだ

った。

ポウはオーギュスト・デュパンという名探偵も造形している。彼は『モルグ街の殺人』と『盗まれた手紙』で大活躍するが、これもまた胸躍る読書経験だった。

どちらの物語でも、ふつうに考えたら「ありえない仮説」をデュパンは立てる。しかし、断片的な事実を総合すると、「すべてを説明することができる仮説はこれ一つしかない」という推理が成り立つ。

名探偵の推理が凡庸な警察官の推理と違うのはそこである。警察官の推理がある限界を超えられないのに対して、名探偵はその限界を軽々と超えてしまう。「たしかに論理的にはそういう仮説もあり得るけれど、常識的に考えて、そんなことは、あり得ない」というふうに凡庸な知性はある時点で立ち止まる。そして、論理をそれ以上進めることを止めてしまう。論理が「この方向に進め」と命じているのに、「常識的に考えて、それは無理」という縛りにとらえられて、足を止めてしまう。

名探偵の名探偵たる所以はそこで「足を止めない」ということである。論理がそちらを指すなら、どんな「あり得ない」仮説であっても、とりあえずそれを受け入れて、検証してみる。この大胆さが実は論理性の実体なのだと私は思う。

『黄金虫』の「私」が最終的に海賊キッドの宝を見つけることができたのは、最初に羊皮紙を拾った時に、「これは海賊の宝の地図ではないか」という「あり得ない仮説」を立てたためである。確率的には、散歩していて、海岸で海賊の宝の地図を拾うというようなことはあり得そうもない。でも、「私」は「そういうことも万が一あるかもしれない」というふうに解釈可能性を広げてから目の前のものを観察した。確率的にどれほど低くても、論理的にはあり得るなら、「あり得る」という可能性を捨てない。それが論理的知性というものの本質的な働きの一つではないかと私は思う。

（中略）

10歳から12歳くらいにかけて、私はホームズを耽読（たん）したけれど、その時にたぶん「論理的に思考する」とはどういうことかということの基本を刷り込まれたと思う。それは「大胆さ」ということである。

「ある前提から論理的に導かれる帰結」のことを英語では「コロラリー（corollary）」と言う。日本語にはこれに当たる適切な訳語がない。コロラリーはしばしばわれわれの常識を逆撫（さかな）でし、経験的な知識の外側にわれわれを連れ出す。私が「論理的に思考する」というのは、それがどれほど非常識であろうと、意外なものであろうと、論理がその帰結を導くならば、自分の心理的抵抗を「かっこに入れて」、それをとりあえず検証してみるという非人情な態度のこ

とである。

シャーロック・ホームズの推理がまさにそうである。ホームズとスコットランドヤード[注4]の刑事たちは犯罪現場で同じ断片を前にしている。そこにあるすべての事実を説明できる「ストーリー」をホームズはみつけようとする。警察官たちは、そうではない。いくつかの事実については、それらを「見なかったこと」にして、出来合いの「ストーリー」に都合のよい事実だけを事実認定する。ホームズはすべての断片がぴたりと収まる「ストーリー」を探し、警官たちは、まず蓋然性の高い「ストーリー」を考えてから、それに当てはまる断片を拾い上げて、当てはまらない断片は捨てる。

ホームズの論理性と、警官たちの論理性の違いは、そこにあり、そこにしかない。すべての断片を説明しようとすると、探偵はしばしば「あり得ないような、とんでもない仮説」を採用しなければならない。警官たちは、それを恐れる。できるだけ「よくある話」に回収したい。でも、ホームズは「よくある話」に収めることには何の関心もない。すべてを説明できる仮説がどのような法外な物語であっても、それを恐れない。

途中までは論理的に思考しながら、ある時点でそれ以上の可能性を吟味するのが怖くなって、思考停止すること、それが「非論理的」ということだと私は思う。それが探偵小説に出てくるすべての凡庸な警察官たちに共通する弱点である。あるところまでは、名探偵と一緒に論理的に思考するのだけれど、ある限界に達すると、目を背けて、思考を停止する。「こんなこと、あるはずがない」という自分の日常的な感覚を論理よりも優先させる。論理的にものを考える人間と考えられない人間の違いはここにあると私は思う。

論理的に思考するというのは幅跳びの助走のようなものだ。ある程度速度が乗ってきて、踏み切り線に来た時に、名探偵はそこで「ジャンプ」する。凡庸な警官たちは、そこで立ち止まる。まさに「ここで跳べ」という線で立ち止まってしまう。論理性とはつきつめていえば、そこで「跳ぶ」か「跳ばない」かの決断の差である。

長じてから、これは探偵小説に出て来る名探偵たちだけでなく、すべての卓越した知性に共通する特性だということに気づいた。卓越した知性と凡庸な思考の決定的な差は知的能力の量的な違いではない。「跳ぶ」勇気があるかどうか、それだけなのだ。

（中略）

もし国語教育において「論理国語」を別建てにするというのであれば、「論理的に思考するとはどういうことか」ということについて十分な議論は尽くしたのだと思う。だとすれば、今私が書いたくらいのことは委員会の議事録に載っていると思う。

私は別に独創的なことを申し上げているわけではない。人類の知性の歴史において卓越し

た業績を残した人たちはどのように論理的に思考してきたのかを簡単に紹介してみせただけである。それくらいのことは、誰にでもできるはずである。

もし、生徒会規約と議事録を読んで年度内に生徒総会の開催が可能かどうかを「推理」するというような知性の行使について「論理的」という形容詞を用いるとしたら、はっきり申し上げてそれは誤用である。その程度のことは「推理」とも呼ばないし、その程度の推論のためには「論理的知性」は不要である。先ほどから申し上げているように、論理的知性というのは「跳ぶ」能力のことだからである。

（中略）

私たちは子どもたちに学校教育を通じて何を教えようとしているのか。もし、子どもたちの中で知性が活発に働くことを教えようとしているのだとしたら、子どもたちに教えるべきことは「知性はジャンプする」ということだ。

今の日本の子どもたちに一番欠けているのは知力そのものではなく、知力を駆動する勇気である。自分の知力に「跳べ」と言い切れる決断力が子どもたちには欠けていると思う。でも、それは彼らの責任ではない。誰も子どもたちに向かって「勇気を持ちなさい」と教えないからである。

（出典：内田樹（うちだたつる）『戦後民主主義に僕から一票』、ＳＢクリエイティブ、二〇二一年。ただし、本文は出題の都合上、一部変更した箇所がある。）

注１　国語教育……日本の初等、中等教育における科目の一つであり、外国人に対する日本語教育とは異なる。

注２　学習指導要領……日本全国の学校で一定の水準が保てるよう、文部科学省が定めている教育課程の基準。およそ十年に一度改訂される。時間割や教科書は、これに基づいて作成される。

注３　「論理国語」と「文学国語」……高等学校の学習指導要領が大幅に改訂され、必修科目の「現代文」がなくなり、「論理国語」と「文学国語」が新設された。二〇二二年度入学生から適用される。

注４　スコットランドヤード……イギリスのロンドン警視庁の通称。

［設問１］

子どもたちに教えるべきこととして、傍線部『知性はジャンプする』ということ」とありますが、その趣旨を二〇〇字以内で説明してください。

［設問２］

筆者が主張する「論理的思考」に対するあなたの考えを、具体例を交え、四〇〇字以上、六〇〇字以内で論述してください。